

「患者サロン」全道に拡大

がん患者が悩みを話し合ったり情報を共有したりする「がん患者サロン」。現在設置されているのは都市部の医療機関が大半だが、道は新年度、空百となつている12カ所の2次医療圏に新設し(図)、道内全域に拡大する。ただし「がんであることを周囲に知られてしまうので患者サロンには行けない」との声もあり、プライバシーに配慮するなどの必要がありそうだ。

(塚本博隆)

新年度12カ所に新設

サロン「わかばカフェ」が月2回開かれている。

北大病院では現在、子育て中の親を対象にしたがん患者のためしばらく子どもに会え



悩み語り合い治療の糧に 「知られたくない」配慮も

進行役を務める藤井あけみは「がん患者は『自分だけが大変なんだ』と思ってしまう。いろいろな人が悩んでいることを知つて励まされる」と説明し、「親が元気になることは子どもを育てる上でも効果がある」と強調する。

北海道がんセンター(札幌市白石区)でも、がん体験者がボランティアで患者の相談に乗る「ひだまりサロン」を月に1、2回開いている。肺がんなどを経験した伊藤新作さん(76)は「最初に来たときは沈んだ顔をしていた患者が、ひだまりサロンに通ううちに元気な顔になつていきました。医師にもできないことを語り合うスペースを設け

ないが、伝えて泣かれて困るし、かといって黙つて病院に行くのもどうなのかな、と思つてしまつ」と悩みを打ち明けた。

これに対し、がん体験者の母親からは「(病気であることなどを)伝えないと子どもとの信頼関係が築けない」「自分の入院中は、食事の写真を子どもに毎日メールで送つたら喜んでいた」などと、経験を基にした具体的なアドバイスが出ていた。

北大病院腫瘍センター助教・北大病院腫瘍センター助教は「がん患者は『自分だけが大変なんだ』と思つてしまつ。いろいろな人が悩んでいることを知つて励まされる」と説明し、「親が元気になることは子どもを育てる上でも効果がある」と強調する。

北海道がんセンター(札幌市白石区)でも、がん体験者がボランティアで患者の相談に乗る「ひだまりサロン」を月に1、2回開いている。肺がんなどを経験した伊藤新作さん(76)は「最初に来たときは沈んだ顔をしていた患者が、ひだまりサロンに通ううちに元気な顔になつていきました。医師にもできないことを語り合うスペースを設け

ないが、伝えて泣かれて困るし、かといって黙つて病院に行くのもどうなのかな、と思つてしまつ」と悩みを打ち明けた。

これに対し、がん体験者の母親からは「(病気であることなどを)伝えないと子どもとの信頼関係が築けない」「自分の入院中は、食事の写真を子どもに毎日メールで送つたら喜んでいた」などと、経験を基にした具体的なアドバイスが出ていた。

進行役を務める藤井あけみは「がん患者は『自分だけが大変なんだ』と思つてしまつ。いろいろな人が悩んでいることを知つて励まされる」と説明し、「親が元気になることは子どもを育てる上でも効果がある」と強調する。

北海道がんセンター(札幌市白石区)でも、がん体験者がボランティアで患者の相談に乗る「ひだまりサロン」を月に1、2回開いている。肺がんなどを経験した伊藤新作さん(76)は「最初に来たときは沈んだ顔をしていた患者が、ひだまりサロンに通ううちに元気な顔になつていきました。医師にもできないことを語り合うスペースを設け

ないが、伝えて泣かれて困るし、かといって黙つて病院に行くのもどうなのかな、と思つてしまつ」と悩みを打ち明けた。

これに対し、がん体験者の母親からは「(病気であることなどを)伝えないと子どもとの信頼関係が築けない」「自分の入院中は、食事の写真を子どもに毎日メールで送つたら喜んでいた」などと、経験を基にした具体的なアドバイスが出ていた。

進行役を務める藤井あけみは「がん患者は『自分だけが大変なんだ』と思つてしまつ。いろいろな人が悩んでいることを知つて励まされる」と説明し、「親が元気になることは子どもを育てる上でも効果がある」と強調する。

北海道がんセンター(札幌市白石区)でも、がん体験者がボランティアで患者の相談に乗る「ひだまりサロン」を月に1、2回開いている。肺がんなどを経験した伊藤新作さん(76)は「最初に来たときは沈んだ顔をしていた患者が、ひだまりサロンに通ううちに元気な顔になつていきました。医師にもできないことを語り合うスペースを設け

ないが、伝えて泣かれて困るし、かといって黙つて病院に行くのもどうなのかな、と思つてしまつ」と悩みを打ち明けた。

これに対し、がん体験者の母親からは「(病気であることなどを)伝えないと子どもとの信頼関係が築けない」「自分の入院中は、食事の写真を子どもに毎日メールで送つたら喜んでいた」などと、経験を基にした具体的なアドバイスが出ていた。

進行役を務める藤井あけみは「がん患者は『自分だけが大変なんだ』と思つてしまつ。いろいろな人が悩んでいることを知つて励まされる」と説明し、「親が元気になることは子どもを育てる上でも効果がある」と強調する。

北海道がんセンター(札幌市白石区)でも、がん体験者がボランティアで患者の相談に乗る「ひだまりサロン」を月に1、2回開いている。肺がんなどを経験した伊藤新作さん(76)は「最初に来たときは沈んだ顔をしていた患者が、ひだまりサロンに通ううちに元気な顔になつていきました。医師にもできないことを語り合うスペースを設け